



ジンバブエの風

発行者のジンバブエ野球会は、1998年4月にジンバブエ初の野球場「ハラレドリームパーク」を作ったジンバブエFOD委員会を引き継ぎ、アフリカの野球振興と野球交流をゆったりと支援する会です。

オリンピック出場で得たもの

オリックスブルーウエーブ 田口 壮

プロに入ってから9年目のシーズンとなった2000年は、最も忙しく、また、充実した1年となりました。それまで国際試合とは無縁だった私にとって、オリンピック出場という機会が巡ってきたからです。スケジュールや体力的には非常に厳しかったとはいえ、オリンピックは単なる国家の代表という栄誉だけではなく、自分の野球観を変えてしまうほどの強い影響を残してくれました。

春先に出場を打診された時は、ピンと来なかったのが本音です。オリンピックは見るもの、という感覚が強く、「なぜこんなにメダルにこだわるんだろう？」と他人事として捕らえていたからです。監督の「お前にとってプラスになることばかりだ」という一言で出場を決めたあとも、正直言って、目の前のペナントレースのほうが気になって仕方ありませんでした。しかしその気持ちも、チームメイトたちに合流してから徐々に変わっていきました。

野球が心から好きなアマチュアの選手たちとの出会いが、プロが忘れてしまいがちな純粋な野球、気持ちをひとつにして勝ちを追う野球を思い出させてくれました。実際、年間135試合をこなすプロは、体力、気力のペース配分を考えていますので、一試合ごとに燃え尽きることができないのです。チームプレーとはいえ、自分の役割をこなすだけ、という感覚のプロが多いのも事実です。ですから、当たって砕けるといった忘れかけていた感覚は、なんとも気持ちのいいものでした。しかも、短期決戦、勝てば世界一。駆け引きをしながら1年戦うのではなく、生死をともにするような気持ちで、短い一瞬の夏に賭ける。集中する条件はすべて揃いました。まるで鉄砲玉のようなアマチュアの選手たちは、勝つことだけにこだわります。プロももちろん勝ちにこだわりますが、その濃さが違うのです。長いペナントの結果として勝とう、というのではなく、目の前のひとつひとつが絶対に落とせない試合、それがオリンピックです。非常に厳しく、同時に痛快な勝負。こいつらと一緒に、天下を取ってやる……そんな気持ちにさせてくれるような、気のいい選手が集まっていました。

普段はリーグで争うほかのプロたちも、個性派で面白い、しかも気の合う面子ばかりでした。プロだから、アマチュアだから、という垣根はあっという間に取り払われ、「野球が好きだ」「お前らと一緒にやる野球はおもしろい」という点で、全員が一致しました。偶然とはいえ、最高のチームが仕上がったと思っています。短期決戦にはチームの和が不可欠。国内ではプロアマの交流やセリーグの派遣問題が取り沙汰されましたが、実際にオリンピックに行った私たちからすれば、何の問題もない、むしろこれ以上ない、ベストメンバーだったと胸を張って言えます。



さて、試合のことを振り返りましょう。私たち日本チームは、メダル候補の一角に挙げられていました。事実、実力としては決してアメリカやキューバに引けを取るとは思っていません。ただ、いかに気持ちがひとつとはいえ、忙しい日程をやりくりしながらのわか作りのプロアマ合同チームでは、全体での練習不足だったのは否めません。精神的なソフト面で充実していても、野球の総合的なハード面で、もう少し一緒に練習する時間が欲しかったと思います。トーナメント形式は、その場その場の爆発力が命ですから、いいチームでありながら、実力を出し切れなかったことが悔やまれます。結果は周知の通り、決勝トーナメントに駒を進めながらもメダルを獲得することができませんでした。世界の列強との戦いは、日本の野球に今後のための大きなヒントを与えてくれたと思います。

まずキューバ戦。一人一人の能力はさすがに頭抜けていますが、荒さも目立ちます。その荒さが表に出ないのは、短期決戦という、爆発力のあるチームに有利な形式だったからでしょう。その荒さの間隙をどうついでいくかが、今後の日本の課題になりそうです。

アメリカは、総合力で現在世界のトップなのは間違いありません。日本がアメリカに勝つためには、彼らに自分の野球をさせないこと。いかにしてペースを崩すかを考えなければいけません。アメリカはパワーに頼った野球をするとよく言われますが、彼らはパワーだけでなく、細やかな野球理論を持ち合わせています。同じ野球をしては勝てません。日本にしかできない、日本ならではの、たとえば脚をもっと絡めた野球など、相手を霍乱させていく野球ができれば、アメリカには勝てないでしょう。

そして、韓国。とかく対日本にはこだわる韓国の選手たちは、まず気力の点で私たちを圧倒していました。プロのラインナップをずらりと揃えた実力以上に、内側からにじみ出る迫力が勝りました。オリンピックは平和の祭典。隣国との関係をよりよくしていくことも国際試合の使命ですが、「日本には絶対に負けない」「韓国には絶対に負けない」というお互いのライバル意識や強いこだわりは、これからも高め合っていける関係として残しておくのもいいかもしれません。まさに気持ちで勝つ、その手本を見せてくれたのが今回の韓国チームでした。

さて、そういった世界の列強の中であって、忘れられないのが南アフリカ代表です。現在のレベルはまだまだ世界と対抗できる状態ではありません。しかし彼らの持つ身体能力は、世界のどの国にも負けない素晴らしいものがあります。計り知れない潜在能力を持った、ダイヤの原石の宝庫、それが南アフリカなのです。今後彼らがいい指導者に恵まれ、基礎から理論的に野球をやり始めた時、南アフリカはメダルの筆頭候補となるでしょう。

将来を感じさせる、非常に好感の持てるチームでした。世界は広く、そんなチームがあちこちに点在している。オリンピックの舞台でなければわからないこういった交流は、日本を奮い立たせ、日本野球がもっと高いレベルを目指すきっかけを与えてくれるに違いありません。

相手が格下であれ、上であれ、どの試合も印象深いものになりました。プロに入ってから、野球の最高の舞台は日本シリーズとと思っていましたが、その日本シリーズでも感じる事のなかった「鳥肌が立つほど興奮する」という感覚を、オリンピックで見つけました。同時に、野球の奥深さを知った思いでした。プロとしておごることなく、さらに上を、世界を目指していきたいという目標もできました。

シドニーから帰ったあと、私たち全日本野球チームは独自の名簿を作り、今後の交友を約束しました。共に戦った2000年の夏は忘れがたく、色あせることはないでしょう。そして私個人には、大舞台をひとつ終えた自信と、世界には目指すべきものがあるという気持ちが残りました。オリンピックの舞台をもう一度踏んでみたい、今度こそキューバに勝ちたい、そして、あの南アフリカの選手たちの成長をこの目で見てみたい。4年後のアテネに行けるかどうかはまだわかりませんが、参加したことによって、オリンピックは身近なものになったと同時に、憧れの度合いを増しつつあります。



「ジンバブエに行ってみようツアー」ご案内

2001年8月12日(日)から19日(日)まで7泊8日

8月12日 関空発10:20 香港着13:45

香港観光 香港発23:50

8月13日 ヨハネスブルグ着6:50

ヨハネスブルグ発10:45 ハラレ着12:15

8月19日 関空帰着13:40



野球場建設の折から皆様には多大なご協力とご厚情をいただ
いてまいりました。それにもかかわらず、これまでアフリカ
の大地とジンバブエの風を直接肌で感じていただく機会を作らずにここまで来てしまいました。

そこでこの度、今年のお盆休暇に、上記の日程で訪問ツアーを企画いたしました。きっかけがな
ければなかなか行く事もないアフリカですが、この機会にご検討いただければ幸いです。

現地5泊で、主な宿泊はハラレ市内の一流ホテルを予定、野球場、世界三大瀑布のひとつのビク
トリア大瀑布、サファリ、その他を訪問予定ですが、詳しくは申込者の思い、ご意見を反映して決
めていくつもりです。

25名定員 航空運賃とホテル代(朝食付)で約30万円、他に香港観光、アフリカでの昼食夕食代、
国内移動費、空港使用料等必要。まだ正確にはお知らせできませんが、40万円くらいになると思
います。

ご検討いただける方は取り敢えず、申し込んでください。あとでのキャンセルは可能ですが、あ
とからの追加は困難が予想されます。ツアーの内容、費用など詳しいことは申込者の中でご相談、
お知らせしていきます。

申し込み第一次締め切りは2月28日ですが、原則として先着順で、定員になりましたら、締め
切らせていただきます。お早めにお申込ください。

「ジンバブエ野球会」入会、継続のお願い

同会の目的：アフリカの野球振興と野球交流をゆったり応援する。

活 動： 年会費及び寄付から必要経費を差し引いて、ジンバブエ在住の村井洋介さんを
通して送金し、目的のために役立てる。

参加者、その他に年1~2回、ニュースレターを送り、ジンバブエのようすや会
計報告、その他催しなどを知らせる。

趣旨にご賛同頂ける方は別紙郵便振替用紙でのご送金にてお申し込みくださいませ。

郵便振替口座：00930-2-126157 ジンバブエ野球会

年会費：1口 3000円

事務局：661-0012 尼崎市南塚口町2-1-2-510 TEL06-6427-4950(自宅)

(伊藤益朗) TEL06-6429-1009(店) FAX06-6429-3005(店)

<http://www.din.or.jp/~azuma/> E-mail:zykai@hkg.odn.ne.jp

発行者：ジンバブエ野球会（事務局は上記の通り）

「ドリームカップ(DREAM CUP)2000」 2000年第2回ジンバブエクラブベースボールトーナメント

村井洋介

2000年12月8日～10日にかけての3日間、昨年からはじまって、現地で大変好評であった全国規模のクラブ野球トーナメント「ドリームカップ」が、今年も「ジンバブエ野球会」スポンサーのもと開催され、昨年以上の熱戦が繰り広げられました。

今年も昨年同様に雨季の真只中にも関わらず、奇跡的に天候に恵まれ、無事に日程を消化できました。今大会は、大会のレベルアップを考え前回の全国7市町から12チーム（ハラレ4、ブラワヨ3・カドマ1、チエグツ1、ムタレ1、グエル1、チノイ1）を全国5地区から7チームに縮小し、各地区の予選を勝ち抜いたチームが本大会で少しでも高いレベルの野球を1試合最低7回以上のインニングが出来るように時間的に配慮した大会日程を組みました。その5地区7チームの代表はハラレ地区2(BASEBOYS / RED HAWKS)、マタベレランド地区2(BASHERS / TIGERS)ミッドランド地区1(JUNGLE SHOOT)マシヨナランド西地区1(RAIDERS)マニカランド地区1(WHITE SOX)。ただし今大会から各代表チームとも地区予選で敗退したチームの中から優秀な選手2名までを補強選手として代表チームへの登録を認めた。これも大会のレベルアップとともに次回2003年のオールアフリカゲームのジンバブエ野球ナショナルチーム選手発掘に繋がるという意図での試みであった。そして、参加チームが昨年より5チーム減った事から大会参加の遠征費を昨年の半額補助から、全額補助とした。宿泊先は球場に近い「チャーチル高校」の学生寮とし、食事、施設とも昨年よりかなり充実した宿泊先になった。大会期間中は青年海外協力隊隊員の協力で、予選大会、選手の遠征、審判、スコアラー、大会運営と、昨年同様素晴らしいものとなりました。更に、今年も野球協会のサポートは殆どない代わりに、現地野球選手で1992年から協力隊のカウンターパートも務めたことのあるマンディシヨナ・ムタサ氏が開催地ハラレのアレンジに奔走してくれた。



野球選手達の間で、野球協会が主体のインタープロビシナル野球大会(全国大会)を既に遙かに凌ぐ人気となった「ドリームカップ」。今回は大会規定の変更の意図がズバリあたり、大会に於ける野球の試合、技術のレベルが昨年よりも高くなった。それが最も顕著に現れたのが、準決勝の2試合で、2試合とも白熱した好ゲーム、結果、つまらないミスが勝敗を分けた。

1試合目のBASEBOYS(HARARE)対TIGERS(BULAWAYO)は昨年の優勝チーム(BASEBOYS)が常に追いかける形の試合展開、最終回表に同点として延長戦へ突入、但しこの延長突入は最終回裏のブラワヨの攻撃に大きなミスがあつての延長突入であった。そのミスとは無死二三塁でレフトへの犠牲フライと思いきや、三塁走者がタッチアップを焦り飛び出してダブルプレー。そして無得点。延長表はハラレ死三塁で三塁正面ゴロ。三塁ランナー飛び出ずも、三塁選手そのまま一塁に送球、得点。二死後、ランニングホームランも出て、2点差、裏の攻撃は三者凡退でゲームセット。

2試合目、これもハラレ対ブラワヨ。RED HAWKS(HARARE)、BASHERS(BULAWAYO)の好カード(両チームとも地区1位)。ゲームは前半投手戦もブラワヨが1点ずつ加点して最終回までに3点のリードで3対0。そのままゲームは終わりかと思われた最終回裏、ハラレ側連打で同点、最後は同点打を打ったバッターランナー(逆転のランナー)の暴走に慌てた守備側が暴投、サヨナラゲーム。ブラワヨ選手は涙涙の幕切れとなった。技術的な力は均衡してきたことは間違いないものの、「野球」というものを理解していたかどうかがこの2試合の明暗を分けたように思われる。

このように、他の各試合を含めても今大会参加の各チームにとつてもものすごく大切な経験が出来た大会であったように思われます。全てのチームがそれなりに昨年の反省を活かしていたことは間違いなく、この感じで来年も更なるレベルアップを期待したい。殆どの選手、チームがこの「ドリームカップ」を最大の目的として野球に取り組んでいる事が今年の大会からも伺えた事は紛れもない事実です。各地区の各選手とも「SEE YOU NEXT YEAR'S DREAM CUP」を合い言葉に第2回大会を終了しました。

更に、大会終了時にはソフトボールの関係者達からも、同大会のようなソフトボールの大会を是非とも開催してほしいとの依頼もありました事、報告いたします。

次頁に大会の結果を記載



変化するジンバブエと変わらないジンバブエの人々

青年海外協力隊0G 岡田千あき

2000年9月、約2年ぶりにジンバブエに行く機会を得た。帰国後もジンバブエが気になっていたが、やはりアフリカは遠く、既に2年の月日が経過していた。今年、ジンバブエでは、選挙に伴う政情不安から、協力隊員が国外退避をするなど、私達がいた頃の平和で穏やかな国というイメージからは、かけ離れているようであった。出発前に受けたブリーフィングでも、最近の危険情報を沢山聞かされ、驚かされた(おどされた)。

まず、ジンバブエの空港に到着して驚いた。他国に例を見ない小さく可愛らしかったハラレ空港の横に、大きな空港ビルが建てられていた。飛行機が、直接横付けできるタラップも4、5本取り付けられており、立派な国際空港だった。早速、街に向かうタクシーの中で運転手に「あれは何?」と聞くと、誇らしげに空港の説明をしてくれた。しかし、工事は終わったもののオープンの予定が延びており、いつから使えるかは分からないと言う。

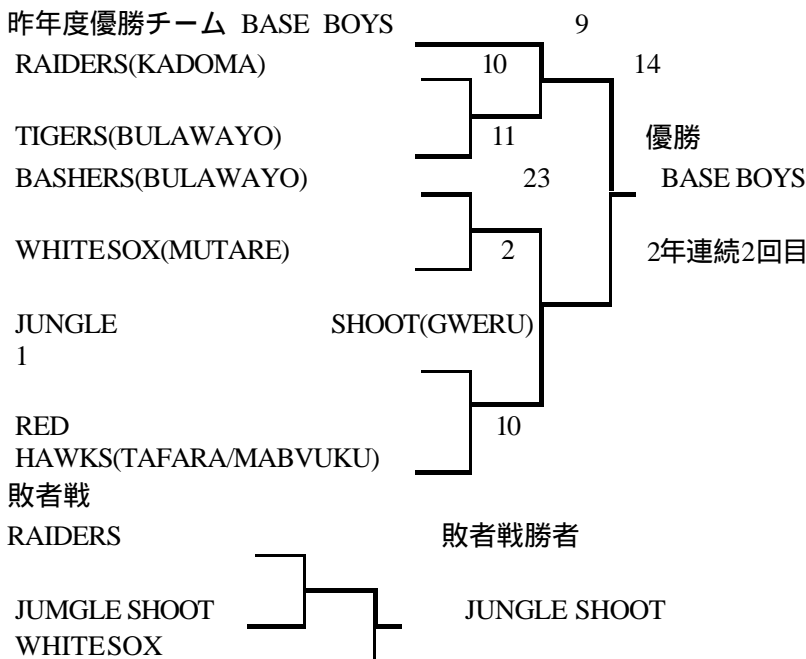
ハラレで1泊した後、すぐに任地であったブラワヨに向かった(ブラワヨの空港は相変わらずボロくてほっとした)。うららかな日曜日に、以前、住んでいた学校の寮を突然訪ねたため、寮の中が騒然となった。「日本から来た」と言ったら、みんな大受けしていた。寮母さんや先生が続々と現れて、この2年間にジンバブエで、また学校で起こった出来事を話して聞かせてくれた。私が働いていた学校の校長先生は、学校のお金を横領しており、あまりにもひどいために教育省の監査が入ることになった。監査が入る前日になって、校長室が火事に遭い、過去50年間の学校の資料は全て燃えてしまった。「校長先生が放火したとは言い切れないけど...」と先生達は言っていたが、校長先生は違う学校に副校長として飛ばされた。くびに成らなかつただけかもしれませんが、普通は降格は有り得ないので、翌日校長先生に会いに行くと、とても落ち込んでいた。

さらに驚いたことに、多くの教え子が亡くなっていた。ジンバブエ赴任中に4人の生徒の死にいくわし、帰国後も2人の生徒の死を手紙で聞いていたが、最近は更に多くの生徒が亡くなっているという。「年組の がね・・・」と次々に聞いていく内に、その人数の多さに愕然とした。推測でしかないが、ほとんどがエイズによる死であろう。以前、日本で読んだ新聞記事で、ジンバブエのHIV感染/エイズ患者数は、国民の3割以上と書かれていたが、ピンとこなかった。しかし、自分の身近にいた教え子が死んだと聞くと、現実として受け止めざるを得ない。ジンバブエ国内でもようやくエイズ教育が活発に行われ、外国のエイズ関連NGOの活動も広がってきているらしいが、死亡者数は急増しているという。

この2年間で、ジンバブエは大きく変化したとも言えるし、全く変わっていないとも言える。しかし、不安定な社会の中で、物価の値上がりにもガソリンの不足にも負けず、シャマリ(ジンバブエ人)は、のんびりと頑張っている。その変わらなさは、やっぱり尊敬できると感じた。



ドリームカップ2000 大会トーナメント結果



2000年9月に総務庁の国際交流事業でジンバブエに行かれた方に、感想文を書いていただきました。この時の副団長を務められたのは、隊員OGの多田(旧姓鈴木)恵子さんでした。

総務庁の行う青年国際交流事業は、航空機による派遣・招へい事業及び船による多国間交流事業を通じた日本と諸外国の青年の交流により、青年相互の理解と友好を促進するとともに、青年の国際的視野を広めて、国際協力の精神を養い、次代を担うにふさわしい国際性を備えた青少年を育成することを目的としています。

遠山亜矢香(神奈川県)

東京外国語大学

モンゴル語学科3年生

小学生の時に、地図帳を広げてビクトリアの滝に一目ぼれして以来、私にとってジンバブエという国は、「いつか行ってみたい国」というよりはむしろ、「必ず行く国」という目的地のような存在となっていました。海外に行く時の私の楽しみの一つに、飛行機から降り立った時の雰囲気を体で感じ取るということがあります。ジンバブエの空気には、独特の雰囲気を感じ取ることなく、またハラレ市内へ車が行けばいくほど、予想以上の近代化に日本とのギャップを感じることなく初めてのアフリカ大陸にもかかわらず、あまりにも自然に街を見つめている



自分に不自然さを感じる程でした。今回の派遣は約3週間という短さだったので、現地の人々と共に何か行動を起こすということではできなかったのですが、滞在すればするほどハラレという近代化の仮面の下にジンバブエが現在抱えている、エイズ、貧困、ストリートチルドレン等の悪循環をくりかえしている問題の根深さを感じざるを得ませんでした。今回の滞在で一番印象的だったのが、ホームステイです。私のホストファミリーは、ジンバブエの伝統音楽の演奏一家で、特にお父さんはジンバブエ固有の心を大切にする人でした。イギリスの植民地支配により持ち込まれたキリストを崇拝するというよりも、今ここに生きていられるのは、祖先の存在があった故なのだから、いつも自分の祖先に感謝の気持ちを心で唱えているとっていました。このような考え方は、自分の生命を大切にすると共に、人の生命も尊いものと考えことに結び付き、ジンバブエの人々の温かな気質にもつながっているのではと感じました。滞在期間中には、様々な施設を訪問したりして、衝撃を受けるのみにとどまり、帰国してもまだ自分の中で消化できていない要素が沢山のこっているのですが、今回の派遣を通じて感じたことを自分の中でしっかりと受け止めながらジンバブエという国の生き方を見つめ続けていきたいと思っています。

辻 美和(東京都)

派遣社員として

イギリスの製薬会社で勤務

世界のニュースの多くは欧米のメディアを通して伝えられ、事実が歪められて報道されていることを知った。

ジンバブエに行く前まで私はジンバブエに対する知識が何もなかった。新聞やニュースで耳にするジンバブエに関する報道はみな『白人の農場を黒人が占拠』しているというものばかりだった。しかし、実際にジンバブエに行き黒人と話をするとともに自分たちが生活していた土地にイギリス人がやってきて自分たちの土地を取り上げた。そして自分たちの土地を取り戻すために独立戦争を戦った。戦いに勝った今もジンバブエの土地の半分以上を白人が占領しているのはおかしいという。これはもっともな意見ではないかと思った。『ジンバブエ = 黒人が白人の農場を占拠している危険な国』という私の頭の中にあった構図はジンバブエの黒人の話を聞きすぐに崩れ落ちた。

私に新聞やテレビで流れるニュースの裏側に隠されている事実を読み取れる人になりなさい、と教えてくれたのはイギリス留学時代に教わったBBCの記者である先生だった。それから3年後にイギリスの植民地であったジンバブエを訪れてニュースの裏側にある事実を知ることになるとは夢にも思わなかった。

いつ、どこにいても与えられる情報を鵜呑みにするのではなく、自分のものさしで物事を計れる人にならなくてはいけないと考えさせられた3週間だった。

島田知一(東京都)

芝浦工業大学3年生

ジンバブエの国を一言で表すと、やさしい国だと思います。やさしい国というのは、感覚でしか味わえない物なのですが、笑顔が似合うという点では、日本人には一生できないものだと、おもいます。経済の方は、そんなに豊かな方であるとは思いませんし、むしろ経済危機にあると思います。しかし、人々は絶えず顔に笑みを浮かべながら、生活しています。お金のある日本人より心の余裕があるんだなと思いました。私は現地で、元JOCVの野球隊員で、現在ソフトボールを教えている、村井さんと会うことが出来たのですが、その方に現地の方と一緒にソフトボールを、させてもらえる機会をいただきました。突然の見知らぬ日本人の参加なのに、現地の方たちはすぐに打ち解けてくれて、とっても楽しいときを過ごすことが出来ました。村井さんがおっしゃった、「ここは最高の国だよ。」というのが、今ではとてもよくわかります。ジンバブエに行って、人間の一番大事な部分というのが、少しわかったような気がします。

夢実現計画

7月15日に3人が兵庫県立西宮北高校で「ジンバブエと青年海外協力隊について」のお話をする機会を持ちました。この会の実現には同校の正岡茂明先生のお力添えがありました。話をしたのは、

(1) 伊藤益朗「ジンバブエに野球場を作る」

(2) 山本肇(社会体育隊員OB)「ジンバブエの紹介」(スライドに沿って)

(3) 吉田京子(音楽隊員OG)「ジンバブエと音楽」(ビデオと歌とムビラ演奏と共に)

話を聞いて下さったのは2年生で、蒸し暑い日の体育館の床に座ってという厳しい環境でしたが、どのような感想をもたれたのでしょうか。西宮北高校29回生学年通信「夢実現計画」第16号から拝見します。

(1組Kさん) 青年海外協力隊の人の話を聞いて、アフリカの人たちは貧しくても明るくて、とても素晴らしいと思った。協力隊の人たちも、ボランティアで遠い外国に行って、自分の持っている技術を教えてあげていて、尊敬できる人たちだと思った。

(1組Kさん) 伊藤さんの話の時、日本ではムリな事でも、外国ではできることにびっくりした。写真を見たら、すごくお金がかかりそうな野球場でした。「何かをやりとげる前に人は死ぬ」みたいな事を言っているのを聞き、私はやりたい事は早めにやろうと思った。山本さんのスライドは、なんかすごくよかった。とにかく空がきれいだった。写真があればもらいたいくらいだ。吉田さんはすごく印象的でした。心が動かされた。歌を歌っている時、楽器をたたいている時、すごく楽しそうで、私もやってみたいと思いました。

(1組Mさん) アメの話にはびっくりした。おかしもめったに食べられないなんて…。私はなんて幸福なんだろう。でもそれはたまたま日本が裕福なだけで、日本が貧しいって事もあつただろう。私にできるコトは何か、もう一度見つめ直してみようと思う。

(1組Mさん) 吉田さんの歌がすごかった。あと、伊藤さんの野球場作りがすごいと思った。教室に帰る時くわしく見てたら、日本と変わらないきれいな所なので、びっくりしました。私も何かできることをさがしてみたいと思いました。

(4組Aさん) 青年海外協力隊のボランティアなんて、今まで大変だろうなとしか思っていなかった。けれど、とても楽しそうにお話をされていたので、大変なだけじゃなくて充実した時を過ごされたんだろうと思いました。ビデオの中のアフリカの人たちは、みんなそんなに裕福じゃないけれど楽しそうでした。恵まれているのにそれに気付かず、すぐに「楽しくない、つまない」を連発する自分たちとは全然違うと思いました。3人の方のお話を聞いて悔いのない充実した日を送りたいと思いました。

(4組E君) アフリカに野球場を作ったっていう話より、アフリカの音楽に何かひかれるものがありました。演奏していた楽器にも、歌っていた人達も、とてもカッコいいーと思い、リズム感がやっぱりいいですね。演奏してくれた「親指ピアノ」も、あれはスゴイですね。割りとは簡単な材料で、あんなに民族音楽らしさを出せるっていう、作り手がまたスゴイと思います。

(4組K君) 思う所は大きく分けて、2つに分けられる。1つは、自然がとても豊にあり、色々な意味で映像を見ながら新鮮な気持ちになれた反面、今こうして暮らしているあたり前の環境が整っていないことに対する抵抗というものもとても大きかった。次に感じた事は前の文と少しかさなる所もあるが、物価の低さと、人々の生活水準の低さに驚いた。今自分自身の生活に満足しきれないにもかかわらず、それ以上に貧しい生活にもかかわらず充実した生活にも大変驚き、自分がいかにぜいたくを言っているかにショックを受けました。

(4組Nさん) 私はボランティア部で、今年の北高祭のテーマが、「青年海外協力隊」だったので、青年海外協力隊について全く知らないわけではありませんでした。でも私が知っているのは資料や紙にかかれた事だけだったので、すごくかたいイメージをもっていたけれど、今日3人の方のお話や歌やビデオなんかを見たり聞いたりして、私が思っていたのとは全然ちがって、すごく楽しそうだなと思いました。私も大人になって、あんな風に外国へ行って、自分の好きな事を教えてあげたり、一緒にできたら、すごくおもしろそうだなと思いました。そして私もやってみたい!と思いました。

(4組Y君) はっきりいって、最後の楽器のことしかおぼえていない。自分は音楽がすきだ。もともと楽器というもの

は自分自身で作るので同じものはない。ちょうど人の個性のように、だがいまは、工場と同じものをつくる大量生産だ。みんな同じ音であつかいやすいが、独特の個性が感じられない。

(5組Kさん) 私は、前から少し外国に興味があります。なので、入りたいと思いました。20歳からと聞いて無理なんだと思いました。歌をうたってる姿は、ほんとうに、楽しそうでした。心から楽しんでいるように見えました。いろいろな国の人と交流できると、何かえられるものがあるのではないのでしょうか。教えられる事がいっぱいあるような気がします。私が20歳になって、興味をもっていたら、ぜひ参加したいです。

(5組Sさん) 「人は途中で死ぬ」というのがすごく印象に残った。ほんとにその通りだと思う。「途中で死ぬ」なら野球場をつくらうと伊藤さんは決心した。私は何の「途中で死ぬ」かわからないけど、それまでにいろいろなことをやってみようと思う。アフリカに野球場をつくるという、普通は思いつきもしないことを実際にやったのをすごいと思う。

(5組Fさん) 一番、吉田さんの話が印象に残った。アフリカに行ってみたくて見たいと思った。吉田さんが着てたアフリカの衣装が欲しいと思った。アフリカの曲は、なんか不思議な感じで、すごく落ち着く感じがした。日本の曲とはまったく違うし、楽器がすごく変な形をしている物などあって楽しかった。あの不思議な楽器にすごい興味を持ったので、アフリカにも行ったら、探して買おうと思う。

(6組M君) ジンバブエに球場をたてるというのは、思いついてもなかなか行動にうつせないと思うが、実際にやってしまうなんて、とてもすばらしい事だと思う。それにいるんな苦労があったと思う。その苦労を乗り越えられたという事は、あの人たちにとってこれから生きて行くのにすばらしい経験になったのではないかなと思う。僕には、こんな大きな事はできないと思うが、自分にできる小さな事をコツコツとやっていきたいです。

(6組Mさん) 「私も行きたい!!!」って思いました。もともと人と関わることが好きなので、いつになるかは分からないし、どういう形でも分からないけれど、いつか必ずあんな経験をしてみたいと思っています。私は吉田さんのような特技はこれと言って無いから「青年海外協隊」としては、行けないかもしれないけれど、一度は経験したいです。

(6組Yさん) 今日話を聞いて、やっぱり何かやりたい事をみつけた人って強いなって思いました。

今、私には、これといった目標もやりたいこともないから、毎日満足した生活ができていない。でもそれは、自分が見つけようとする努力が足りてないからっていうことに、最近気がついた。だから、ちょっとずつやりたいことをやってみようと思う。今日の人たちみたいに、大人になっても、やりたいことがもてる人になれたらいいと思います。

空想紀行 ジンバブエ

岡田経子

短歌誌「短歌人」2000年12月号「空想紀行」欄より

是非一度は行ってみたい土地を一ヶ所あげ、空想の紀行文を書いて下さい。

その土地で一首詠んでみて下さい。

ひとりの日本の野球少年が大人になって描いた夢。大勢の人々の協力もあって出来た球場、そこでキャッチボールがしたくて、私は使い慣れたグローブを持ってアフリカ大陸の南、ジンバブエを目ざして旅をする。飛行機の窓から見える景色はアフリカらしく大部分は薄茶色に覆われていた。激しい揺れのあと着陸した空港は想像していたより整っていた。一隅より歓声が上り跳ねるように褐色の肌の人達が手を振りながら近づいて来た。あとは握手のあらしである。国や世代を越えた交流とはこのようなことかと思う。なんと素朴な人々か。そしてやっと着いた球場ではジンバブエの人たちが丹念にグラウンドの石を拾っていた。多くの少年は素足だったからである。こんなにも大切にされている球場は世界中どこにもない。全員でブラボーと叫んだ。

腰かがめグラウンドの石拾いゆく素足の人に砂風の舞う

ガーナからの便り

青年海外協力隊 松本裕一

12月に入りガーナもクリスマス一色の雰囲気となってきました。首都・アクラの賑やかな通りを歩くと、ニッコリ笑ったサンタクロースの看板が点々と道端に並び、お店というお店の窓は“Merry Xmas”の文字とともに様々な色で装飾がなされ、レストランでは宝石のようにクリスマス・ツリーがキラキラ輝く今日この頃です。

そのクリスマスもさることながら今年12月はガーナにとって特別な月。4年に一度の大統領・国会議員選挙が行われるからです。特に今回はこれまで10年近くその地位に就いていた大統領が出馬しなかったため、12月7日に行われた一次選挙では与党からの候補者と最大野党からの候補者がデッドヒートを繰り広げました。結局どちらも過半数を占めることができなかつたため、決着は年末28日の第二ラウンドに持ち越されることに。ちなみに国会議員選挙の方は失業率の上昇、ガーナの通貨・セディの下落による物価の上昇等から「変化」を望む国民の意見が反映されて10何年かぶりに野党が過半数を占めることになりましたが…。まあ私としては結果がどうであれ、前回のジンバブエのように人が殺し合うほど治安が悪化しなければいいなあと心から願うところです。さてガーナの国事情はこの辺りにして、皆さんお待ちかねのガーナ野球事情について。前回のジンバブエの風でお伝えしましたとおり、5月にナイジェリアを倒すところまでは順調だったのですが、その後は一変してどん底に。まず6月に入ってナショナルチームの練習場所であるアクラ市内の学校からグラウンドの使用禁止が言い渡され、それ以降ナショナルチームの練習は中止となったまま。また9月には15歳以下のナショナルチームが南アフリカで行われるアフリカ大会に出場予定で、7月から続けたチーム強化練習で準備万端だったにもかかわらず、大会直前になって政府（スポーツ省）、民間企業（ガーナ航空）からのスポンサーを得ることができずチームの南ア行きは不可能となり出場断念。さらに噂には聞いていたガーナ野球協会の墮落。色々と物事をコントロールしたがるだけで普及に向けて話し合うべきことが山積されていながら、なんと6月から10月まで一度も月例ミーティングが開かれなかつたことなど。



そんな感じで運営面ではあまりパツとしないガーナ野球ですが、その他ではゆっくりながらもしっかりと野球の浸透は進んでいます。主なところでは学校の巡回指導を通した野球少年の人口増加（現在60校近く）、クラブチーム数の増加（現在大人8チーム、少年12チーム）、現地人コーチの指導力向上、日本製のものとそれほど変わらない現地産グローブの製造が可能となるなどなど。また最近の新しい傾向として、野球をする男子生徒に影響されてか「私達もソフトボールをプレーしたい」と熱望する女子生徒が急増し、ソフトボール人口も増加（現在8校）しています。

さらにここでガーナ野球の将来を大きく左右するかもしれないBIGなニュースを一つ。来年一月に沖縄で行われる大リーグ・チーム「アナハイム・エンジェルス」のプロテストになんと、ガーナ人選手が参加することになりました。この夢のような話は元ジンバブエ、ガーナ両国で野球選手として活躍した堤君のアイデアで、彼の勤務する会社の全面的協力を得て実現することになったものです。その夢のようなチャンスを得たのはポール（27歳）とジョシュア（24歳）の2選手。この二人はガーナのBEST2選手でナショナルチームではポールがキャッチャー、ジョシュアはショート。ともにスピードとパワーは攻・走・守いずれにおいても日本の大学野球あるいは社会人野球レベルでも通用するのではという逸材です。仮にどちらか一人でもテストをパスすれば、もちろんアフリカでは初となる黒人プロ野球選手の誕生となり、ガーナだけではなくアフリカ全体の野球普及につながることでしょう。現在この二人は、アフリカの夢実現に向け常夏の国・ガーナで毎日汗だくになりながら調整中ですので、日本の皆さんも彼らが日本に行きました際には是非とも熱いご声援の方、宜しくお願いいたします。

そして最後にもう一つ、新野球選手として宍倉隼人隊員が7月にガーナに赴任し、現在私とともにガーナ野球普及のため奮闘中です。ちなみに私は一月末で任期を終えガーナを離れることとなりますが、この力強い助っ人の加入でガーナ野球普及はより一層加速することになるでしょう。期待しててください。

それでは21世紀が皆さんにとって健康な幸せに満ちたものでありますよう祈りつつ、また日本でお会いするのを楽しみにしております。

私と野球

尼崎市立園田東中学校校長 伊藤征人

私の子どもの頃(昭和30年以降)は、何時も放課後には運動場で野球をしていました。それも、柔らかいゴムのボールを素手で打つ野球でした。今でもその時の、心がウキウキ、ボールを打つときのドキドキした気持ちが蘇ってきます。あの頃は学年などは飛び越えて、皆が集まって野球をしていました。また、その頃、グローブを父から買ってもらいました。嬉しくて嬉しくて、いつもそのグローブを油で磨いていました。

軟式野球もその頃からやりかけました。小学校の運動場はガラスを割ったりするので、軟式野球はさせてもらえなかった。家の近くに、競艇場の池を造った折にできた広い砂場があった。その砂場は学校の運動場ほどの広さがあった。そこに集まって野球をすることにした。砂場の野球はとってもおもしろかった。ゴロは恐くなかった。ボールが止まってくれるから、ゴロの打球は恐れることもなく捕球できた。フライが上がると砂に足がとられて思うように動けない面白さがあった。野球に疲れたら、砂場を掘って、落とし穴を作りました。遊びに来た子どもが穴に落ちるのを待つ楽しみもあり、本当に暗くなるまで、遊んだものです。

中学・高校時代は野球から離れていました。浪人時代に野球が暗さを吹っ飛ばしてくれたのです。義兄が散髪屋をしていて、月曜日は店が休みです。そこで、近所の散髪屋の人達で野球のチームを作りました。その中に私も入れてもらいました。毎週月曜日には、武庫川の河川敷で練習をしました。子どもの時、砂場で野球しか経験していない私にとって、土の上での野球は恐怖でした。ゴロがすごいスピードで飛んでくるのには閉口しました。私の経験の中のゴロは止まってくれるものでした。それが私の顔に向かって飛んでくるのですから、自然と顔を背けてしまいました。困りました。時々、野球場を借りて他の散髪屋のチームと試合をしました。フライならなんとか捕球できそうなので、ライトを守らしてもらいました。今でも覚えていることでは、ファールでしたが球場の外の学校にまで飛ばしたことが、自分でも信じられなくて、忘れられない思い出として残っています。暗い浪人時代を野球というスポーツをすることで乗り切れたように思います。

大学時代はテニス部に入り、野球からまた離れました。中学校の教職に就いてからもテニス部の顧問としてやっていました。

しかし、ひょんなことから野球部の顧問をすることになったのです。それと言うのは、尼崎では一番小規模な学校に校長として着任しました。その学校での2年目、野球部の顧問が転勤してしまい、存続の危機にありました。新3年生が1人いて、廃部にするのは可哀想であるので、新1年生が何人か入部してくるようだったら、存続させてやりたいということになり、私が顧問になることにしたわけです。その年の新1年生は9人入部してきました。その9人の中で、野球をしたことのある生徒はたったの3人でした。あとの生徒はなんとかボールをグローブでとれる程度でした。キャッチボールも満足にできない状態でした。私の子どもころでは考えることもできないことでした。その年の夏の大会、3年生1人、1年生9人で大会に臨みました。その時の試合ほど悔しい思いをしたことはなかった。生徒達が可哀想でしかたがなかった。涙が出そうでした。いっこうにスリーアウトにならないのです。相手の攻撃ばかり続く。結果は5回コールド、得点は0対?でした。覚えていないほど相手に点がはいりました。ナガーイナガーイ一日でした。

この悔しさをバネにして、その後、1年生9人で猛練習?をしました。1人でも欠けると試合ができません。部員は、『試合で1勝!』の合い言葉を胸に、9人でがんばりました。時には、5人のときもあり、ボール拾いも大変でした。この学校は、運動場は尼崎の中学校で一番広い、しかし、生徒数は一番少ないものですから、運動場の周りは草がぼうぼうで、ボール拾いもたいへんでした。(野球場ができる以前のジンバブエのようでした。)練習試合を何回かしました。しかし、結果は0対?でしたが、少しずつですが野球になってきました。しかし、その年度の異動で、私が学校を変わることにになり、合い言葉の1勝もさせてやれず、その学校を去ることになりました。愛着が出てきた頃でしたので、悲しい思いで別れました。

振り返ってみると、私は、本格的な野球は経験してはいませんが、野球が私の人生を豊かにしてくれたと思っています。この頃は、娘(11才)と犬と私で、キャッチボールをしたりノックをして楽しんでます。

2000年6月1日～2001年1月4日までにジンバブエ野球会にご入金いただいた方々は次のとおりです。

ありがとうございました。(敬称略)

明石正治 赤松一朗 朝田 誠 吾妻 智 天春 淳 荒川俊雄 有馬宏昌 粟田浩史 飯尾明郎 石原一興
石割 徹 伊藤和子 伊藤卓朗 伊東 登 伊藤博文 伊藤益朗 井上 通 井上久雄 岩崎広貴
岩田章一 上田博司 宇都宮年夫 梅崎道夫 浦谷行信 衛藤譲二 江野村 和哉 大嶋 脩 大谷育弘
大塚恵美 大塚美幸 大橋 登 岡崎朝絵 岡崎誠吾 岡田経子 岡田子路 岡本征夫 荻野祐男
尾崎泰輔 小澤 託 小原正浩 角杉源太郎 梶 正義 柄谷 桂 仮屋 囿 神田武男 神田 武
神田治久 喜多泰裕 北島清誠 木村 昭 切貫可一 金 守良 腰高和代 五島 浩 小林芳子 (次頁へ)

事務局便り

事務局 伊藤益朗

私たちがジンバブエの野球を応援するようになってから2年半、野球場を計画した時点からですと6年の月日がたちました。アフリカでは村井さんをはじめ、歴代協力隊員の皆さんの尽力で野球やソフトボールの楽しさを共有できる仲間が増えています。遠い所の大きく違った環境の中で暮らしていても、「キャッチボールしよう」で通じ合える人たちがいるのだと思うと嬉しくなります。

また、協力隊の皆さんも現地に大きな成果を残して帰国し、日本でそれぞれの生活を始めています。感覚のズレに悩まされながらも次第にわが道を選び、歩いていく姿に幸いあれと祈るばかりです。

私は昨年8月にコスモスの徳山銑造さんと韓国のソウルに行って、市内を流れる漢江の河川敷でキャッチボールをしてきました。異国の空をバックにボールを追うのも、大陸の芝をはねるボールをつかむのも心地よいものでした。また、念願の韓国プロ野球を観戦しましたが、その一体となった応援は甲子園の阪神タイガースファン顔負けの熱狂ぶりでした。日本での試合前のセレモニーのような両軍シートノックはなく、日本の高校や大学が普段の練習でするようなふんだんのシートノックをそれぞれの練習時間内にしていました。中にはベンチに帰るのを呼び戻されて、追加のノックを課せられている選手もいました。そのあと、しばらくグラウンド整備で間を取り、いきなりゲームが始まりました。

今年のお正月はタイに行きました。前号で木嶋一黄さんの文章にありましたシリキット女王記念球場を訪ねて現地に住む関学OB浦谷行信さんとキャッチボールをし、タイの協力隊野球隊員、古主さんに会ってお話を伺ってきました。

今回の田口壮さんの文章にあります「世界は広く、そんなチームがあちこちに点在している。・・・」の通り、私はさまざまな地のさまざまな野球を通して世界の人たちを実感できれば幸せだなと思います。

2000年6月以後の今期にご入金いただきました方のお名前は別掲しています。ご確認ください。ありがとうございました。今期、他に協力いただける方は郵便振替にてよろしく願いいたします。

幕を開けました21世紀が皆様にとって素晴らしい日々でありますようにお祈りしています。

<ご報告>

- 1) お盆休みの8月12日からジンバブエツアーを計画しました。案内を別掲していますのでご検討下さい。
- 2) 2月24日に講演会をします。トーマスC.カンサさんからアフリカを学び、協力隊OGの方々を通してジンバブエの音楽を体感しましょう。お忙しくても是非ご予定に入れて申し込んでください。詳しくは別掲しています。
- 3) クリスマスカードをドリームカップのときに選手に書いてもらいました。今年は、一昨年6月から昨年9月頃迄に会費を頂戴した方にて12月10日ごろ発送していますが、着きましたでしょうか。
- 4) ジンバブエ野球隊後援の第2回ドリームカップの盛り上がりは嬉しいですね。
- 5) 昨春からガーナに短期支援で派遣されていました松本裕一氏も1月末で離任し帰国されます。ありがとうございました。
- 6) 在ガーナの松本氏らの要請を受け、ガーナベースボールクリニック出席の為、1月に村井氏は渡ガーナの予定。
- 7) ジンバブエ野球隊のホームページができました。元ジンバブエ協力隊調整員の吾妻智さんのホームページ <http://www.din.or.jp/~azuma/> のなかに入れていただきましたのでご覧下さい。又Eメールは zykai@hkg.odn.ne.jp です。
- 8) 南アフリカはジンバブエやガーナにアフリカ予選で大勝したあと、グアムに勝ってオリンピックにアフリカから初出場。その上、シドニーでのオランダ戦でアフリカ勢にとって歴史的なオリンピック初勝利をものにしました。
- 9) 昨年7月29日に夏の集いを開催しました。野球をした後、近くの銭湯で汗を洗い流し、懇親会へ。名古屋からご出席の村井さんのご両親も交え、吉田京子さんからお借りした圧倒される音楽シーンのビデオなどで、楽しいひと時を過ごしました。
- 10) 今回はたくさんの方に執筆をお引き受けいただき、豊富な内容になりました。ここに感謝申し上げます。多くの人に読んでいただきたいと思っていますのでせいぜいお知り合いに回してください。
- 11) 2000年6月から2001年1月7日までの現地での主な支出は次の通り。(a)ソフトボール遠征援助。(b)ドリームカップ後援。(c)村井氏ガーナコーチングクリニック参加のための交通費、(d)日本の会員へのクリスマスカード及び発送代などで、詳しい会計報告は期の区切りの次号にてお知らせします。

(前頁続き)

小林雅子 ごはんや 近藤道夫 佐藤江美 澤田眞史 芝川又美 杉澤俊子 住吉正雄 瀬尾聡司
ZY会有志会 妹尾佳士 田居秀雄 鷹江精一 高澤和男 高瀬隆征 高谷晋介 高橋恭三 竹内幸雄
竹瀬福次 多田正樹 巽久一 田辺雅通 谷村友一 谷村文子 土屋明生 堤尚彦 出口明子
寺本徹 天有良祐 徳島浩 徳山銑造 鳥居四郎 中西利一 長沼加代子 中村忠史 西村勇
沼野耕三郎 野口由貴子 林逸子 桧垣稔 平内望 平木覚 広岡正信 藤井道雄 藤岡敦子
藤下美穂子 藤本正晴 逸見孝太郎 本荘雅章 本多恵子 前島宗甫 前島信平 松本商店 右柳好博
三島芳元 三瀬和義 光内数喜 宮田典計 村井達朗 村上英樹 村上晴海/靖子 山口芳子
吉川美恵子 吉木直也 吉田貞比古 和田陽之 和田勝行



「アフリカをもっと知りたい」 講演会と音楽の集い ご案内

おはなし トーマス C. カンサさん
 「南アフリカの子供たちと私の見た日本」
 日 時 2001年2月24日(土) 午後1時30分～
 午後1時30分 講演会 トーマス C. カンサさん
 3時 ジンバブエの音楽演奏
 元青年海外協力隊ジンバブエ音楽隊員
 吉田京子さん・三木まさよさん
 3時30分 懇親会
 アフリカビール、おつまみ、ドリンクで
 4時30分終了

<会場> 尼崎市立労働センター (阪神尼崎駅より北徒歩10分) TEL06-6481-4561

<費用> 当日払い: 講演会 1000円 懇親会 800円
 (今回、費用をいただきますが、もし余剰金が出ましたら講演会分はカンサさんに、懇親会分はジンバブエ野球会に入れます。ご了承ください。)

ジンバブエ野球会をきっかけにアフリカに関心を持つことになった私たちがもっとアフリカを知りたいと思って、アフリカから来て関西に住んでおられるトーマスC.カンサさんにお話をうかがう機会を設けました。

カンサさんの、思いを実行していくパワー、自由な発想の人生、障害や人種、国、貧富を包み込む豊かな生き方などを学びたいと思います。

準備の都合上、(当日飛び入りも可ですが)できるだけ事前に下記事務局まで申し込んでください。〔TEL.06-6429-1009(店) 6427-4950(自宅) FAX.06-6429-3005(店)〕

<トーマス C. カンサさん>

詩人、英会話講師。南アフリカ共和国に生まれ、1984年より日本在住。

日本では捨てられる中古の車椅子を修理して、すでに2000台を南アフリカに送り続けています。詩集の売上などを輸送費やエイズにかかった子供のホスピス支援にあてています。社会に感動を与えた市民を表彰する1999年度「シチズン・オブ・ザ・イヤー」受賞。

<交通のご案内>

阪神尼崎駅より徒歩約10分

北へ680m

尼崎市バス「労働福祉会館」下車

阪神尼崎駅……13.15.31.43

J R立花駅……15.43

阪急塚口駅……13

阪急武庫之荘駅……15

J R尼崎駅……11.23

阪急園田駅……11.22.23

急行は止まりません

駐車場がありませんので市バス等をご用意ください。

のつした番号は総合文化センター下車

